

# 野地潤家先生年譜

大正九年（一九二〇）

當歳

一月四日、愛媛県喜多郡菅田村（現大洲市菅田町）大字大竹甲一〇〇一番地第一に、父野地伊佐夫、母サツキの次男として生まれた。父伊佐夫は明治四年（一八八二）九月一〇日、父村上伝治郎、母サトの次男として生まれ、明治一七年（一八八四）二月、野地治三郎と養子縁組をした。母サツキは明治一五年（一八八二）六月二八日、愛媛県喜多郡喜多山村大字喜多山乙三〇六番地に父久保田忠次郎、母タネの次女として生まれた。明治三五年（一九〇二）一月二九日、伊佐夫の兄村上伝と結婚し、明治三六年（一九〇三）五月五日、長女ツルエが生まれた。のち、村上伝は、日露戦役に出征し、東鷄冠山北砲台の戦鬪に決死隊の一員として加わり、戦死した。伝の戦死後、村上家の要請もあって、伝の弟伊佐夫と結婚した。明治四一年（一九〇八）一月二日、長姉重古出生。ついで、明治四四年（一九一〇）二月四日、次姉花子（後年、節子と改名した）出生。大正三年（一九一四）四月二日、兄正明出生。しかし、兄正明は大正九年（一九二〇）一月三日、九州帝国大学医学部整形外科にて死亡した。母の胎内にいる時、母が転んだのがもとで、生まれつき足がわるく、その手術をするため九大附属病院に入院していたが、手術時の麻酔薬のききすぎのため、ついに意識がもどらなかつたという。性来やさしくかつ聡明だった兄正明のことは、折にふれて母の口からよく聞かされた。長男をうしなった後に生まれてき

たため、両親としてはこのほか大事に育てたのだと、三人の姉たち（ツルエ・重古・花子）は、よく話してくれた。

潤家という名前は、父伊佐夫と姉ツルエとが辞書をめくっているうち、潤屋（「礼記」の富潤屋、徳潤身）にめぐりあい、それをもとにしてつけたという。

大正一一年（一九二二）

二歳

五月八日、後年研究の対象の一つとした「国語の力」（垣内松三著、不老閣刊）が刊行される。

大正一二年（一九二三）

三歳

五月九日、弟忠明が生まれる。弟の名づけの席のことが不思議と印象に残っている。当時わが家はまだ石油ランプで、山間の集落にはまだ電燈はついていなかった。ランプのひかりに照らされ、母に抱かれていた弟（あかんぼう）の顔のことをおぼえている。

大正一三年（一九二四）

四歳

大雨が降って洪水になり、山の道路がまるで川のように流れた。わが家の下の方へ降りて、出水の様子を見に母か姉に連れられて行き、履いていた下駄をとられて流失させてしまったのを、子ども心におぼえている。

大正一四年（一九二五）

五歳

隣近所の子どもたちと夢中になってよく遊んだ。小学校への入学がしだいに近づいていたが、遊びほうけて、数もことばもおぼえよ

うとはしなかった。母と姉とが心配して、困憊裡端で、数のかぞえかたを教えてくれたのをおぼえている。

大正一五年・昭和元年（一九二六）

六歳

二月二五日、大正天皇崩御。当時愛媛県立大洲高等女学校に通っていた次姉花子が天皇崩御のことで学校からの通知に接し、なにかと両親に相談したり、話題にしていたのをおぼえている。

昭和二年（一九二七）

七歳

四月、菅田尋常高等小学校尋常科第一学年に入学し大竹分教場（一年から四年まで、複式二級）に通う。入学式のある日の朝、母は赤飯をたいて入学のかどを祝ってくれた。各学期の始業式のある日も、このことはずっとつづけてくれた。中学校へ通うようになって、このことはつづけてくれた。なつかしい思い出である。

担任は若い女教師の吉田文字先生だった。文字どおり花が咲き匂っているかと思われするような笑顔の美しい先生であった。第三学期（昭和三年一月測定）の身体状況は、身長一六センチメートル、体重二三・三キログラム、胸囲は六一センチメートルであった。学級は男女あわせて二九名。七月に二日の病欠欠席があった。

昭和三年（一九二八）

八歳

八月、大村はま先生、信州諏訪高女にご赴任になる。約二〇余年後、ご指導を受けるようになる。

一〇月一六日、妹久美子生まれる。妹が生まれた時は、南久米村梅川（愛媛県喜多郡）の姉（重吉）の嫁いだ大野家へ泊まりに次姉に連れていかれていた。帰宅して、妹の生まれていたことを知った。二年生の担任は西村郷一先生。すでに小学校校長を退職され、分教場

に臨時に教員として来ておられた老先生であった。時には、ポケツトからあめ玉をとり出し、それを口に入れて、授業をされたりした。第三学期（昭和四年一月測定）の身体状況は、身長一一〇センチメートル、体重二六・九キログラム、胸囲は六三センチメートルであった。

昭和四年（一九二九）

九歳

三年生の担任は矢野健行先生だった。めがねをかけていらした。第三学期（昭和五年一月測定）の身体状況は、身長一二三・五センチメートル、体重二〇・五キログラム（第二学期八月九月Vは、二五キログラムだったから、ずいぶん瘦せたことになる）、胸囲は六五・五センチメートルであった。九月に一回遅刻をしている。矢野健行先生には、後年、太平洋戦争下、菅田本校にお勤めになつていころ、特にお願いして、帰省した折、授業をみせていただいたことがある。その晩は、宿直室に泊めていただき、いろいろお話をうかがった。

一月、後年、広島高師時代に出会う、「国語国文の教育」（西尾実著、古今書院刊）が刊行される。

昭和五年（一九三〇）

一〇歳

四年生の担任は小泉（のち、宮田と改姓）茂穂先生だった。児童数は同じく二九名だった。第三学期（昭和六年一月測定）の身体状況は、身長一二八・三センチメートル、体重二七・一キログラム、胸囲は六六・八センチメートルであった。遅刻は五月に一回している。各学期とも級長をつとめた。第二学期も半ば、両親が稲の刈り入れにかかっているところ、家で妹久美子の子守りをしながら、勉強

へのほんとうの気持を固めた。担任の小泉茂穂先生から、「納税」と題する綴り方を書いてくるように言われ、みずから腹案を練って書いて提出した。

#### 昭和六年（一九三二）

一一歳

五年生になると、大竹分教場から本校（大字菅田にある、菅田尋常高等小学校）に通学することになった。朝早く家を出て、途中畷川を渡舟で渡ったりしながら、かなりの道のりを徒歩で通わなければならなかった。担任は城戸恒雄先生であった。本校では、高学年は男女にわかれて学級が編成されていた。尋五男子組は六四名、女子組は四四名、担任は山口政雄先生であった。遅刻は、五月に一回、六月に二回、九月に二回、一〇月に一回、三月に一回あった。第二学期は級長をつとめた。また、ランニング選手として、六年生の選手とともに、郡内の他校での交流試合に参加した。第三学期（昭和七年一月）の身体状況は、身長一三二センチメートル、体重は三〇キログラム、胸囲は六六・五センチメートルであった。ランニング選手として練習に励んでいたところ、父親は大洲町から、グリコを箱入りでもとめて帰り、それを母親が毎朝一箱ずつ渡してくれたものだった。弟も妹もうらやましかったと、のちになっても忘れずに言ったりした。

#### 昭和七年（一九三二）

一二歳

一学期末、父、自転車（子ども用）を買ってくれる。  
六年生（男子組）の担任は味村実先生（喜多郡長浜町ご出身）であった。児童数は六二名になった。第三学期（昭和八年一月測定）の身体状況は、身長一三六・六センチメートル、体重三二・五キロ

グラム、胸囲はどうしたとかか記入がない。第二学期（九月）の時点では七二センチメートルであった。遅刻は一二月に一回であった。六か年を通じての精勤賞を受けた。

修学旅行は大分県下別府温泉であった。五〇銭のこづかいをもらって、八幡浜から豊豫海峽を渡って別府港へ。みんな船酔いをしてしまった。附添いの味村実先生、山口政雄先生おふたりは、さすがにお元気だった。こづかいはたちちはかなくなってしまう、さびしかった。当時、運動会の徒競走、障害物競走は、ずっとテープを切っていた。

#### 昭和八年（一九三三）

一三歳

三月二五日、菅田尋常小学校を卒業した。  
卒業式の席上、矢野溜校長先生が、とくに名前を挙げて、よく努力したと言ってくださった。そのとたん、ふっとふりかえてこちらを見た、同級生のMさんの視線はいつまでも印象に残っている。

四月、隣接大洲町にあった、愛媛県立大洲中学校に入学する。当時、菅田小学校からの進学者は男子では一人だった。昭和初期の世界的不況から脱し切れず、農村はずいぶん疲弊に喘いでいる時代であった。担任は福居（のち、河内と改姓）鍊三郎先生。第一学期は、学友のことがよくわかるようになるまで、仮級長をつとめた。第一学期（四月検査）の身体状況は、身長一三八センチメートル、体重三四・四キログラム、胸囲七一センチメートルであった。

一月四日、富士山とみす一周（本校―税務署前―女学校前―蚕業取締所前―河野写真館前―富士橋―菅田東―松ヶ鼻―十夜ヶ橋―若宮―広川橋―中町―小学校前―本校）マラソンに初めて参加する。一年

から五年まで全校参加のマラソンである。順位二〇番までが入賞ということになっていたが、一五番に入る。タイムは六七分三六秒であった。

#### 昭和九年（一九三四）

一四歳

二年生の担任は白田時太先生（東京高等師範学校文科第二部入国語漢文V出身）であった。身体状況（四月検査）は、身長一四五センチメートル、体重四一・二キログラム、胸囲は七六センチメートルであった。

脇川にかかっている富士橋のあたりを会場にして開かれた水泳大会では棒飛び込みで入賞した。

中一の時も、中二の時も、陸軍幼年学校の身体検査・学科試験を受けたが、結果（学科試験）は思わしくなかった。

#### 昭和一〇年（一九三五）

一五歳

三年生の担任は、ひきつづき白田時太先生であった。この年初夏、両親には無断で小学校時代からの郵便貯金通帳から預金を全部引き出し、東京文学院講本（六冊、六円八〇銭）を購入した。文学（創作）へのひとり勉強を始め、東京文学院の機関誌（投稿を主にした）に投稿をするようになった。三年次、副級長をつとめた。身体状況（四月検査）は、身長一五二センチメートル、体重四六・二七キログラム、胸囲は七九センチメートルであった。級友伊東君・長谷川博君らとともに陸上競技部に入って、八〇〇メートル、一五〇〇メートルを練習した。

#### 昭和十一年（一九三六）

一六歳

四年になると、進学コース・就職コースの二組にわかれた。西組

は進学組、担任はひきつづき白田時太先生であった。東組の担任は仲田庸幸先生（広島高等師範学校文科第一部入国語漢文V出身）であった。

四月中旬、南九州へ修学旅行。八幡浜↓大分↓阿蘇（坊中）↓熊本↓鹿児島↓高千穂↓宮崎↓別府というコースだった。この時のこづかいはい五円であった。旅行中、俳句をつくり手帳に書きつけていった。およそ三四〇句にものぼった。

身体状況（四月検査）は、身長一五六・五センチメートル、体重五二・三キログラム、胸囲は八二センチメートルであった。

#### 昭和十二年（一九三七）

一七歳

五年生の担任も持ち上がりで白田時太先生であった。第二学期、配属将校のすすめで陸軍士官学校の入学試験を受ける。校友会活動では、教練部の理事をつとめた。身体状況（四月検査）は、身長一六〇・三センチメートル、体重五四・四キログラム、胸囲は八六センチメートルであった。校友会誌「予章」に詩・随想などを寄稿した。

投稿文芸誌「秀才文芸」一〇月号に入選した詩「サナトリウム」（藪田義雄氏選）に対して、第二回秀才文芸賞を贈られた。受賞者には「置時計」が記念品に贈られることになっていたが、これはついにとどかなかった。この時のペンネームは野池水哉であった。

#### 昭和十三年（一九三八）

一八歳

三月五日、愛媛県立大洲中学校卒業。「春の鳥おもひおもひに巣立ちけり」の句を来賓の方から卒業生へのはなむけとして贈られた。校長は有馬純次先生であった。

四月から大洲税務署(当時、税務監督局は広島市八丁堀にあった。)に雇として勤めた。勤めながら、広島高等師範学校文科第一部(国語漢文)の受験勉強を進めた。俸給月額は三〇円、六月からは三二円になった。これで受験参考書を購入し、一方始められたばかりの欧文社(現旺文社)の通信添削をも受けた。一〇月一四日附で大洲税務署を退き、受験勉強に専念した。

二月二六・二七の両日、広島高等師範学校の入学試験を受けた。受験番号は一三番であった。ちなみに、大洲中学校を受験する時は、四一番であった。

昭和一四年(一九三九)

一九歳

年が明けて、広島高等師範学校入学試験のうち、第二次試験(専門科目の試問と人物の試問)を受ける。合格する。

四月一日、広島高等師範学校文科第一部入学。校長は塚原政次教授、文科第一部主任は鶴田常吉先生であった。岡本明(四明と号された)教授の主宰された短歌結社「言盡」誌発行)に入り、短歌実作の手ほどきを受けた。毎月開かれる歌会にも参加した。第一学年の間は全寮制で、淳風寮に入った。所属は陸上競技部で、一三号室、室長は三芳利治氏(理三)、副室長は河本開一氏(文二)であった。

この年、井上桂園先生(書道)、熊本師範学校教諭から広島高等師範学校助教としてご来任。それから長くご指導を受けることになる。

昭和一五年(一九四〇)

二〇歳

高等師範二年生になって、広島市水主町の日野さん方に下宿する。

移ったへやは、たまたま大谷藤子氏(後年の女流作家)が下宿しておられたということだった。大谷藤子氏は広島女学院の教師を勤めておられた。

夏休みに入っても、七月末まで広島に残り、毎日のように図書館に通って、「戦記物語と国民性」という、かなりの分量のレポートをまとめ、休暇明け、鶴田常吉教授のもとに提出した。二年生の自山研究の一環として提出を求められていたのである。

昭和一六年(一九四一)

二一歳

三月下旬(二一日入金)から二八日入金)まで、近畿地方へ研究旅行。引率教官は鶴田常吉教授。主として萬葉の歌枕を訪ねる旅であった。高等師範三年生になって、再び淳風寮に入る。副室長室員の一人に文科第一部乙(大陸科と称していた)所属の小川利雄氏(後に広島高等師範附属国民学校・広島大学教育学部附属小学校教諭、現安田女子大学助教)がいた。

二月八日、太平洋戦争に突入する。宣戦布告のことを淳風寮できく。やがて広島市内の菓子店などの店頭から、シュークリームをはじめ、生菓子の類はすべて姿を消してしまふ。

この一年間の通読冊数は一四三にのぼる。この読破冊数は、爾後みずからの読書生活の努力目標の一つとなる。この年、小川利雄氏らの受講を通じて、藤原与一先生にめぐり会う。金子金治郎先生にご来任。「源氏物語」のご授業を受ける。やがて応召出征された。

昭和一七年(一九四二)

二二歳

六月から七月にかけて、附属国民学校・附属中学校での教育実習に参加する。指導教官は、附属国民学校が田上新吉先生、附属中学

校の方は瀬群教（統三）先生、溝渕鉄夫先生、小谷等先生であった。中学校では研究授業（漢文、頼山陽の詩）をした。

八月一六日朝、卒業論文（「言霊信仰の回想と光華並びに護持」）を書き上げて提出する。指導教官は岡本明教授であった。

九月二三日、広島高等師範学校文科第一部繰り上げ卒業。戦時下、学友たちはそれぞれ軍隊に入ったり、外地の中等学校へ赴任したりした。一〇月一日、広島文理科大学文学科（国語学国文学専攻）に入学する。土井忠生教授、鈴木敏也教授、藤原与一講師のご指導をいただく。

この年、家庭教師として森岡千代子（当時、小学校六年生）を教える。昭和二〇年八月六日、原爆投下にあいなくなる。昭和五〇年（一九七五）、その挽歌集「柿照葉」（溪水社刊）を刊行した。

この年、夏休み前、真下三郎先生ご来任、西鶴文学の講読をしていただく。

昭和一八年（一九四三）

二三歳

一〇月から、文理科大学二年生。夏休み前の「言霊」歌会で、急に話（歌話あるいは文学講話）をするように岡本明先生から言われ、自信もないまま、その場でみずからの考えをまとめつつ話した。これが人前で話す体験をした初めであった。爾来、回数を重ねて現在に及び、昭和五五年（一九八〇）九月末では、三、三〇〇回をこえている。

八月、第八回言霊夏行が岐阜市内長良川のほとりにある専応寺で開かれ参加する。「慟哭論」を報告した。朗詠大会で入賞し、北住敏夫氏著「万葉の諸相」を贈られた。つづいて、名古屋市内、愛知

県女子師範学校講堂で開かれた美夫君志会主催の万葉集夏期講座に参加した。高木市之助・沢瀧久孝・山田孝雄・久松潜一・平林治徳・倉野憲司・松田好夫氏らの講義を聴く機会に初めて恵まれた。この講座には、泊めてもらっていた市内の種橋正徳氏宅から通った。種橋正徳氏の妹千代子さん（当時、名古屋市立高女生）も一緒だった。

昭和一九年（一九四四）

二四歳

土井忠生先生のご指導を受けて、卒業論文の題目を「話しことはの教育」とする。

八月、文科系の学生は広島県下竹原町の春華園に移り、電鍍工場ではたらく。三井系の電鍍工場へ通うてはたらくしているうち、ふとしたことから、竹原町在住の戸河家の方々と知り合う。また、竹原町在住の「言霊」関係の会員の方々との短歌を通じての交流もあった。戦争の激化とともに徴兵猶予はなくなり、陸軍特別甲種幹部候補生として、仙台陸軍飛行学校に入ることになった。

勤労動員先であった竹原の町を離れ、仙台陸軍飛行学校へ入校することになった時、学友のひとり、つぎのような長詩を贈ってくれた。

祝 登雲

野地潤家兄

髭風を吹いて暮秋嘆ずるは誰が子ぞ

征途

大君の／しこのみたてときほひ立ち／仇なすえびすはらはむと／征で立つ空の雲はるか／風吹きささぶみちのくの／春

は如何にぞ明けゆかむ／うつまみえて二年を／友垣むすぶ  
それもはや／草葉にやどるつゆじもの／夢なりけらし星あか  
き／しはすの宵の酒盛に／注きてうたへるそのあした／君  
青雲と身をなして／思ひもはるか身もはるか／天がけわたる  
あらわしの／征きてかへらぬつはもの／一途ぞ今の命なれ  
／かへりみすれば事しげき／二十余年の生なりき／谷間に  
生ふる杉苗の／雲をのぞみて立ちきほふ／その山中に生れ出  
で／四時清涼の氣にふれつ／春啼く鳥にうたひそめ／秋立  
つ雲にあはれ知る／なほきをわかき命にて／荒波こゆる若竹  
の／りしく猛き丈夫と／あゝますらをと生ひ立ちて／あ  
はれも深き人の身や／君がまことをとらへしは／みだれてあ  
つき胸の火に／ふるゝ涙の恋なりき／うるはし人をおもかけ  
に／七世をかけて恋ふるとふ／かなしきものは恋なれや／  
月のくまなき秋の夜を／海辺によする波音に／思ひをのぶる  
それもまた／みぞれに浮ぶまぼろしの／人恋ひしたふ身なれ  
ばか／されば落葉と身をなして／風に吹かれてひるがへり／  
思ひみだれてみちのくの／宮城野にまで迷ひし／そのいに  
しへのうた人の／起生の春や今如何に／多情多恨の人の身の  
／思ひは昨にまさるとも／ますらを君の門立ちは／さばへ  
の如きえみすらを／微塵にくだきちらすべく／あゝ戦ひのさ  
なかにぞ／榮えある空のつはものと／きはひきはへる若草の  
／いさみいさめるますらをの／思ひ極むる朝ぼらけ

昭和十九年歳おしせまりて戦ひいよ／きびしく老若男女国を  
あげて醜虜を撃つ此時にあたり畏友野地潤家君空の防人として

召をうけ勇躍仙台に赴かる

旧交を思つてうたゝ惜別の情に堪へず、聊燕辞を連ねて君を送る

この長詩は、奉書巻紙に墨で書かれていた。勤労働員のさ中、学生生活を共にしてきた心情をさまざまにこめて歌われたものである。

仙台陸軍飛行学校への入校にあたっては、肩にかけて征途につく日の丸の旗に、多くの恩師知友後輩の人たちが寄せ書きをして、武運長久を祈ってくれた。土井忠生先生からは万葉集の歌の一節を、鈴木敏也（杜子夜）先生からは「天翔る鵬の翼や神の春」の句を、藤原与一先生からは「純美」のことを、それぞれ記していただいた。さらに、中島光風・江藤保定・木原茂・服部梶蔵・大井章・井上正敏・磯貝英夫・森本正一・深見正夫・清瀬良一・浦武彦・福島充次・田中正治・鈴木淳一・藤田英夫・向井富徳・田中晋・飯豊毅一・坂上彦四郎・森下庸三・桑原英昭・佐藤稔・糸井寛一・乾寛・岡田実・阿部功・小泉公光・中村亮・景松・種橋正徳・今中武夫のみなさんにもはげましと別れのことをばもらった。

生きて再び広島に帰ってくることはないとの思いがつよく、昭和一四年（一九三九）広島島の地に学ぶようになってつながらいうことのできた、多くの人々との別れを惜しみつつやがて仙台へと向かわなければならなかった。

昭和二〇年（一九四五）

二五歳

一月四日、遺書をしたためて四国の山村のわが家をたち、広島へ向かう。途中、呉市に住んでいた次姉（花子）のうちに寄り、また広島では岡本明先生のお宅にうかがって、別れのごあいさつをした。

「ますらをと出でたつ潤家はほほ染めてうらひめし恋言ひたるあはれ」  
「再びは見ることなげんものふの潤家のまみに向かふ夕ぐれ」  
岡本明先生は、その折のことをこのように詠んでくださった。種橋正徳氏の下宿にもより、名古屋市内にあった種橋正徳氏の家に一泊し、やがて初めて白河の関を越え、一月九日の夜は、岩沼駅前の旅館に泊まった。一月一日、陸軍特別甲種幹部候補生として仙台陸軍飛行学校に入る。第六中隊第四区隊（重爆撃機九七重の整備）に配属される。中隊長は陸士出身の内田少佐、区隊長は雨森一栄少尉、区隊附は初め青木（早稲田大学出身）見習士官、ついで阿部（東大独文出身）見習士官であった。八月二十五日、同校在学中、終戦によって復員する。復員時は軍曹であった。広島市に原子爆弾が投下されたことは、仙台陸軍飛行学校の疎開先、白石町郊外の福岡国民学校の宿舎で知る。

九月二十九日、広島文理科大学文学科（国語学国文学専攻）卒業。

昭和二年（一九四六）

二六歳

自宅（愛媛県喜多郡菅田村大字大竹）で待機し、国語教育についての考えを書きつけたり、松山市の仲田庸幸先生宅の読書会「おくのほそ道」を中心とした）に月一回参加したりする。昨年八月二十五日復員して郷里に帰って来てからの一年間、自宅での久しぶりの勉強は、後にいろいろの意味で役立つことが多かった。

夏、仲田庸幸先生のお伴をして、令恩幸文ちゃんとともに、石楯に登る。

八月二〇日、昭和二年勅令第二百六十三号により適格と判定される（愛媛県教員適格審査委員長）。同日付で、地方教官に任せら

れ、愛媛県立松山城北高等女学校に勤める。昭和二一年度の第二期・第三学期、二年生四クラス（松・竹・梅・桜）の国語の授業を担当し、ほかに専攻科の授業にも出る。当時は三津浜の叔父（父方）村上善作の家に下宿していた。

昭和二年（一九四七）

二七歳

三月三〇日、重信一枝（父重信雄三郎、母菅代の次女）（当時は愛媛県立松山城北高女に勤め、家庭科担当、同僚であった。）と結婚し、三津浜の下宿から松山市平井へ移り住む。結婚後、一枝は青年師範学校に移った。

四月から、三年（新制中学校へ切り替えられる。）五学級（松・竹・梅・桜・菊）二四八名の国語科を担当する。また、梅組の学級主任をつとめる。九月六日、父伊佐夫死去。

昭和三年（一九四八）

二八歳

三月九日、長男澄晴生まれる。三月三十一日、文部教官に任せられ、母校広島高等師範学校に勤めるようになる。この年の四月入学の学年の担任を命ぜられる。高等師範学校では、一年生に「古今和歌集」、二年生に「平家物語」・「近松世話物浄瑠璃」、三年生に「古事記」の講読を担当した。別に二年生に「文学概論」、三年生に「国語科教育法」、四年生に「芸術論史」などの講義をした。

昭和四年（一九四九）

二九歳

五月二五日、広島高等師範学校教授に補せられる。新制広島大学発足する。

一月から翌昭和五年（一九五〇）七月まで、勤務の余暇、勤労青年のために開設された速記学校（初級・中級・上級）に通い、

速記術を習得して、子ども（長男澄晴をはじめとして、次男照樹、長女玲子ら）のことばの採録に備える。

昭和二年（一九五〇）

三〇歳

一月一六日、次男照樹、広島市基町北区五五〇において生まれる。四月から、広島市にある女子商業高校の生徒たちに速記の初歩を教える。これは昭和三〇年三月末までつづける。また、大下学園祇園高等学校・併設中学校に向いて、国語科実地研究をつづける。

六月二三日、東京都港区水川小学校での文化集会の席上、芦田恵之助先生・古田拓先生に初めてよそながらお目にかかる。

九月二日、全国大学国語教育学会、東京都日比谷高校において発会式。

昭和二六年（一九五二）

三一歳

四月一日、広島大学助教（教育学部）に配置換えになり、兼ねて広島大学広島高等師範学校教授に補せられる。

教育学部国語科に国語教育研究会が発足する。西尾実氏の国語教育関係の著書を輪読の対象とし、昭和四三（一九六八）までつづく。

昭和二七年（一九五三）

三二歳

三月末をもって、広島高等師範学校閉校。担任をつとめた最後の卒業生を送り出す。

四月一二日、長女玲子出生。この夏から広島大学現職教育（認定講習）の講師を勤める。広島市内はもちろん、広島県下の小・中・高の数多くの先生方と知り合うことができた。

一〇月六日から十一月五日まで六週間、上京して、昭和二七年度教育指導者講習（IFEL）国語科教育を受講する。講座主事は

東京教育大学教授石井庄司博士であった。六週間に及ぶ国語科教育の講義・討議・研究による収穫は大きかった。

七月下旬、国語教育個体史研究を思い立ち、その構想を固め、やがてみずからの松山城北高女における国語科教育の実践展開の記述作業を開始した。

二月、「話しことばの教育」（広島プリント社刊）を刊行する。

昭和二八年（一九五三）

三三歳

三月二五日新制広島大学の第一回卒業式挙行。四月から、安田学園幼稚園教員養成所の講師を勤め、一般教育「日本文学」の講義を担当する。

この夏も、広島大学現職教育（認定講習）の講師を勤める。

一月、「教育話法の研究」（柳原書店刊）を刊行する。

二月、昨夏から大学での授業のひまひまに書きつけてきた国語教育個体史研究の記述を終える。記述にあたっては、佐々木（のち、伊形と改姓）悦子さんの学習ノートを借りて引用することとした。

昭和二九年（一九五四）

三四歳

四月、長男澄晴、広島大学教育学部附属小学校に入学する。六年間、田辺一先生に担任していただく。七月から、長男澄晴のことば（対話生活）を記録したカードを整理し、その実態の記述作業を開始する。

一方、「国語教育個体史研究」（I・II・III）を、三月、六月、九月に、白鳥社において印刷、三〇〇部限定出版とする。郷里の杉山の杉の木（かつて父が苦勞して育てた）を売って印刷費を捻出した。

昭和三〇年（一九五五）

三五歳

四月一日から広島大学文学部助教教授併任。第三講座近世文学の演習の一つを担当し、芭蕉の「おくのほそ道」をとり上げる。

昭和三十一年（一九五六）

三六歳

三月、「国語教育」個体史研究」（光風出版社）を刊行する。

四月一日から広島大学文学部助教教授併任。ひきつづき、「おくのほそ道」を担当する。安田女子短期大学保育科の講師として、一般教育「日本文学」を担当する。後には、「言語の保育」をも担当した。昭和五〇年（一九七五）三月までつづけた。

四月、次男照樹、広島大学教育学部附属小学校に入学する。

山根安太郎先生（教室主任）は教育学部東雲分校へ、清水文雄教授（東雲分校）は東千田の教育学部へ、それぞれ配置換えになる。

四月から、広島大学大学院教育学部専攻（国語科教育、修士課程）に北岡清道君が初めて入学する。

五月、この年三月二五日に卒業した国語科の有志（昭和二十七年度入学生）が二七会と称する読書会を始める。毎月どの日曜日かの午後集まって半日夏目漱石の作品を読むことになり、助言者として招かれる。「三四郎」から輪読を始めた。この二七会は爾来ずっとつづかれ、現在（昭和五五年九月）に至っている。

五月、第一二回全国大学国語教育学会・第六回全国国語教育研究協議会（広島大会）が広島大学ならびに広島市内の小・中・高を会場に開かれる。その事務局の仕事を担当する。

昭和三十三年（一九五七）

三七歳

四月から、大学院研究科（国語科教育）の授業（調査資料研究）を担当し、院生北岡清道君を相手に一対一の授業をする。学習語彙

の調査研究から始める。

一〇月から、文学部助教教授併任。後、昭和四〇年（一九六五）三月末まで、文学部助教教授併任。「おくのほそ道」、夏目漱石三部作「三四郎」「それから」「門」、「芭蕉七部集」（主として、「猿蓑」「炭俵」の演習を担当した）。

学図（学校図書）の小学校国語教科書の編修の仕事にたずさわる。

昭和三十三年（一九五八）

三八歳

六月、妻一枝、子どもたち三人（澄晴・照樹・玲子）を連れて、広島市郊外桑々園に遊び、やや高いところから飛び降りて骨折をし、大内外科病院に入院する。

八月、全国大学国語教育学会、札幌市において開かれる。芦田恵之助のことをとり上げて発表する。帰途、小樽駅に途中下車し、芦田恵之助翁の高弟沖垣寛氏のお宅ならびに緑小学校を訪ねる。沖垣寛氏小樽駅まで見送ってくださり、アイスクリームをいただく。暑さの中、ご芳情を感謝しつつ帰途につく。

一〇月、島根県益田市東中学校において二年生に「椰子の実」（近代詩）の授業をする。この時、初めて坐席順写真により、あらかじめ生徒たちの顔と名前とを全部おぼえて教室に臨む。

昭和三十四年（一九五九）

三九歳

四月、長女玲子、広島大学教育学部附属小学校に入学する。

六月一日、姉ツルエ逝く。

七月下旬、教育学部四年生の有志に誘われて、九州九重山に登る。八月四日、長男澄晴の「幼児期の言語生活の実態」の記述を完了する。

この年、長谷川孝士氏を助け、森本正一氏らとともに、中学校国語(三省堂)の編修の仕事をし、学部卒業生杉原(のち、大崎と改姓)康子さんの助力を受けつつ手伝う。

この年から、近代国語教育年表作成のため、本格的な調査にかか

る。

四〇歳

昭和三五年(一九六〇) 八月、「高等学校国語教育研究論文目録」(広島大学教育学部国語教育研究室刊)が刊行される。

八月、「徒然草教育問題史」戦前の旧制中学校・女学校を中心に「」を書き上げる。

昭和三六年(一九六一)

四一歳

三月、「国語教育学研究」(白鳥社刊)を刊行する。

五月一日、実践国語研究所(所長西原慶一氏)から垣内松三賞を受ける。受賞式は八月東京において行われた。

八月、広島市小学校国語教育会の夏季講座(合宿研究)が広島県佐伯郡湯の山温泉(白雲閣)で開かれ、「マリーのきてん」(垣内松三教授の論考)について講演をする。昭和三八年、三九年、四一年を除き、連年この講座に出講し、そのつどテーマを考えて、講演を重ねてきた。

昭和三七年(一九六二)

四二歳

七月、広島大学昭和三七年度学校図書館司書教諭講習の講師を勤め、読書指導を担当する。

一二月、この月から広島市内小学校の先生方有志と毎月一回集まって国語教育研究を進めることにする。現在(昭和五五年九月末)

に至っている。

昭和三八年(一九六三)

四三歳

二月、大村はま先生、ペスタロッチ賞をお受けになる。教育学部大講義室にて、附属中学校一年C組の生徒を対象に授業をなさった。

三月一四日、恩師岡本明先生、京都の自宅でなくなられる。告別式に参列し、霊前において先生のお歌を朗詠する。

四月から広島大学大学院教育学研究科担当を命ぜられる。今までは演習指導を担当していたのである。

七月末から八月末まで一か月、沖繩に認定講習講師団の一人として渡り、名護・那覇の二か所で、「国語科教育法」を担当する。

昭和三九年(一九六四)

四四歳

八月一〇日、岡本明先生の歌碑が先生の生家(京都府桑田郡美山町鶴ヶ岡豊郷)の庭に建立され、除幕式に参列する。歌碑に刻まれた歌、ふるさとの吾家はしし梁の太く黒きを仰ぎつつ寝る(昭和一〇年作)を、碑の前で二回朗詠する。

帰り、京都市嵯峨の亀山肇君の家に案内され、ばらづくりを始め、すぐれた実績を挙げていることを初めて知る。

一〇月、昭和二七秋、長男澄晴がもらってきて育ててきた、ミイ(ねこ)がオリンピック開会式の前夜、一枝らにみとられつつなくなる。

十一月、ひとまず「近代国語教育年表Ⅱ大正編」を刊行する。

昭和四〇年(一九六五)

四五歳

四月から広島大学教育学部東雲分校講師に併任され、前期は「日

木文学史」、後期は「徒然草」の演習を担任する。

八月下旬から二月初旬まで、中国新聞コラム「灯浮標」に一回随想を載せる。

昭和四一年（一九六六）

四六歳

山根安太郎先生ご退官のため、ずっと担当していただいた「国語教育史」の講義を引き継ぎ、中等国語教育史を中心に講ずる。

九月、学位請求論文「近代国語教育史研究」正式に受理され、二月七日、広島大学から教育学博士の学位を授与される。

昭和四二年（一九六七）

四七歳

二月、高知大学教育学部において集中講義を行う。芦田恵之助の実践様式の研究を中心に進めた。

四月一日、広島大学教育学部教授。清水文雄博士ご退官のあとを受けて、国語科の教室主任を勤める。

四月、久しぶりに故郷の生家に帰り、年若い母のそばでしばらくの時を過ごした。学位を受けたこと、教授になったことをも、あわせ報告しつつ、長い年月母の注いでくれた温情を思い、胸がいっぱいになる。

八月、昭和四二年度広島大学学校図書館司書教諭講習の講師を勤め、利用指導・読書指導を担当する。

一〇月から、広島大学文学部講師に併任され、「平談俗語」の問題をとり上げる。

十一月八日、母サツキ逝く。訃報を出張先の大分市の宿で夜半にきく。

昭和四三年（一九六八）

四八歳

六月二八日、広島大学厚生委員会委員を命ぜられる。

この年、七月、広島県坂町坂中学校三年生に説明文の实地授業を、同じく七月、島根県出雲市河南中学校三年生に作文の实地授業を、

十一月、新潟県吉田町吉田中学校一年生に作文の实地授業を行う。

ほかに、小学校高学年（五年・六年）の实地授業を、島根県・長崎県で行った。

昭和四四年（一九六九）

四九歳

広島大学紛争激化し、東千田キャンパスは封鎖されて、授業が行えない状態に入る。

七月、昭和三三年（一九四八）四月以来住み慣れていた、広島市基町北区五五〇から広島県安佐郡安古市町上安弘億団地一一〇に移る。念願だった書庫をもつこともできて、教育学部の研究室に置いていた自分の書物を初めて収めることができた。

八月一七日、封鎖解除。広島大学教育学部警備班長を勤める。

九月二四日、広島大学厚生委員会委員長を命ぜられる。任期は昭和四五年六月二七日まで。飯島宗一学長とも直接話し合う機会が得られるようになる。長野県諏訪中学校一年生の折、井上敏夫教諭（現埼玉大学名誉教授）に国語を教えられたという話をきく。

昭和四五年（一九七〇）

五〇歳

四月一日、広島大学教育学部附属小学校長に併任され、のち、昭和四七年（一九七二）四月再任されて、昭和四九年三月末日まで勤める。

二月七日から一二日まで、沖繩へ、国語教育の臨地調査のため、大学院生中渕正堯君とともに渡る。

一二月、長女玲子がもらってきて飼っていた、親ねこのチビが急になくなる。子ねこのたま（五月生まれ）だけが残ることになる。

昭和四六年（一九七二）

五一歳

六月、文集「源平桃」（文化評論出版社）を刊行する。

七月、昭和四六年度学校図書館司書教諭講習講師を勤め、利用指導・読書指導を担当する。

昭和四七年（一九七二）

五二歳

広島大学教養部講師に併任され、総合科目の一部を担当する。

六月、芦田恵之助研究同好会発足。広島市内の小学校の先生方有志とともに芦田恵之助の綴り方教授関係の書物を月一回輪読して、現在（昭和五五年九月末）に至っている。

七月、「作文教育の探究」（文化評論出版社）を刊行する。

八月、広島高師卒業三〇周年記念同期会・同級会を開く。古田敬一教授（文学部）とともに世話係を勤める。

昭和四八年（一九七三）

五三歳

三月中旬、九州大学教育学部において、集中講義「国語科教育法」を担当する。受講者は文学部の学生諸君であった。

広島大学教養部講師に併任され、総合科目の一部を担当する。

四月、「幼児期の言語生活の実態Ⅱ」（文化評論出版社）を刊行する。長男澄晴満二歳期の言語生活の実態を記述したもの。爾後、「幼児期の言語生活の実態Ⅲ」を昭和四九年一〇月に、同じくⅣ巻を昭和五一年一月に、同じくⅤ巻を昭和五二年一月に刊行し、全四巻を完結させた。

七月中旬、岡山大学教育学部において集中講義をする。「国語教

育史」を講じた。

一〇月一日、広島大学統合移転・改革に関する基本計画委員会委員を命ぜられる。一月二六日、基本計画委員会研究・教育体制専門委員会委員を命ぜられる。

一〇月、「読解指導論」（共文社刊）を刊行する。二月には、すでに「国語教育原論」（共文社刊）が刊行されていた。

十一月、第四回博報賞を妻一枝とともにそれぞれ受賞する。

昭和四九年（一九七四）

五四歳

三月、広島大学教育学部附属小学校長を任期満了により退く。

四月一日、広島大学教育学部附属中学校・高等学校校長に併任される。昭和五一年四月再任され、昭和五三年三月末まで勤める。

八月、第一回石井賞（全国大学国語教育学会）を受ける。

九月、「国語教育学史・国語教育通史」（ともに共文社刊）を刊行する。

一二月、「話しことば学習論」（共文社刊）を刊行する。

昭和五〇年（一九七五）

五五歳

四月、広島大学教育学部附属中高等学校創立七〇周年記念式典舉行。

五月、「作文指導論」（共文社刊）を刊行し、「国語教育研究叢書」全六巻完結をみる。

七月、歌集「柿照葉」（深水社刊）を刊行する。広島高師時代に家庭教師をした森岡千代子の被爆死を悼む挽歌三〇〇首を収めたもの。歌集刊行がきっかけとなって、千代子の母親笹代さんと三〇年ぶりに再会する。

昭和五一年（一九七六）

五六歳

四月一日、広島大学評議員に併任される。

六月、「国語科授業論」（共文社刊）を刊行する。

九月、岡山大学教育学部において「国語教育史」（集中講義）を講ずる。

十一月五日、小学校家庭科教育全国大会において、「生活づくりへの知恵と教育―「たべること」をどう学ぶか―」と題して講演（広島市公会堂）。

広島大学教育学部改組のため、またそれに伴う同附属学校の将来構想等のため、小委員長・座長等を勤める。

昭和五二年（一九七七）

五七歳

一〇月一日、広島大学評議員に併任される（任期は昭和五四年九月三日日まで）。

一〇月二六日、大村はま先生教職五〇年記念大会（筑波大学附属小学校講堂）において「国語教育史上から見た大村教室の業績」と題して講演。

昭和五三年（一九七八）

五八歳

三月末をもって、広島大学教育学部附属中高等学校長（併任）任期満了となる。

附属小学校長在任中四年間に、学校長として行ったあいさつ・話などは、児童・教官・保護者・研究会参加者等に対して、すべて三九五回のほった。

また、附属中学校・高等学校長在任中四年間に行った、あいさつ・話などは、すべて四六七回のほった。

附属中・高等学校のばあい、生徒たちを対象に行った話・あいさつなどは、年平均五三回であり、教官・保護者・同窓会員等を対象に行ったあいさつ・講話などは、年平均六二回であった。

六月一七日、広島大学教育学部改組により、従来の高等学校教員養成課程は教科教育学科に編成替え。国語科は国語教育学（大講座）となり、国語教育学を担当する。同じく六月一七日、広島大学附属学校部長に併任され、昭和五五年三月まで勤める。一一附属校園をかかえた附属学校の運営を軌道にのせるため努める。

一〇月、「読書指導相談事典」（共文社刊、広島市内の小学校国語教育研究会の有志の方々との共同研究）、「作文指導実践入門」（共文社刊、広島市安佐地区作文教育研究会の方々との共同研究）を刊行する。

一月、「個性読みの探究」（共文社刊）を刊行する。

昭和五四年（一九七九）

五九歳

一月、山根安太郎先生ご逝去になる。

三月、歌集「遠山脈」瀬群統三（昭和一七年六月〜七月、附属中学校で教育実習をした折の指導教官をしていただいた先生）著（溪水社刊）、石田民生君らの尽力により刊行。

四月、全国国語教育学会理事長就任。

四月一六日、西尾実先生ご逝去になる。

一〇月一日、広島大学評議員に併任される（任期は五六年九月三日まで）。

八月、愛媛県立松山城北高等女学校の生徒たち（卒業生）同級会を開く。六〇名の参会者あり、「個体史」をめぐってなつかしむ。

昭和五五年（一九八〇）

六〇歳

一月、「わが心のうちなる歌碑」（桜楓社刊）を刊行する。

三月、長男澄晴、理学博士の学位を受ける（広島大学）。四月、アメリカ国立衛生研究所に研究員として勤める。

昭和四五年四月からの一〇年間に、附属小学校・中等学校・附属学校の仕事（いずれも併任）をつづけてきたが、四月からは、学部の仕事に専念しうるようになった。

八月一日（月）、妻一枝とともに還暦祝賀会（光葉会主催）に招かれ、心からの祝意につつまれ、感謝の念あふれる。

九月一日、横山潤子さん（附属小学校・中学校・高等学校在任時代の児童・生徒であった）（芸大作曲科在学中）来談。学び始めた新しい世界の息のつまるようなきびしさを語ってくれる。

九月五日晩方、昭和四五年五月に生まれ、ずっとわが家に住みついてきた、ねこ（たま）がなくなる。すっかり家族の一員のように過ごしていただけに悲嘆の情に沈む。

九月、「話しことは教育史研究」（共文社刊）を刊行する。

十一月七日、第三七回中国文化賞（中国新聞社）受賞。

（昭和55年11月10日稿）